

## リース業 事始め



宮内義彦

オリックス  
取締役兼代表執行役会長

事務所の応接セットで打ち合わせをしている何の変哲もない写真ですが、私にとっては忘れられない一葉です。1964年2月、当時のニチメン本社3階にある社長室。アメリカからリース事業の研修を受けて帰国した若造社員である私が、新設予定の会社（現オリックス）に出向が決まったお二人の先輩にリース料の計算をお教えしている風景です。中央が当時の神戸支店長、後に当社の常務になられた伊藤正寛氏、右が河本明三秘書課長で、その後当社の副社長になられた方です。

● ● ●

米国留学から帰国し、8月入社という変則的な形でサラリーマン生活を始めて3年ほど経って海外派遣要員の多い海外統括部に配属され、さてどこの駐在になるのかと海外雄飛を夢見ていた毎日でした。突然人事部から、「新設するリース会社のためにアメリカへ業務研修に行きなさい」「君が間違っ



て習ってくると事業がうまくいかないよ」という大変なプレッシャーを受けて渡米しました。サンフランシスコで約3カ月、リース事業の「いろは」を習って帰国した直後の写真です。伊藤さんがそろばんを使って何やら計算されているのも実に懐かしいお姿です。

● ● ●

私はアメリカで習ってきたことを新会社の皆さんにお教えするのが使命と思い、短期のつもりで新会社に移籍したのですが、企業というのは走り出すと、そのようなことを許す環境ではありません。日々の仕事に追われ忙しく過ごしているうちに、とうとう今日に至る人生の過半を送ることになりました。

若き日に夢見た国際ビジネスマンの姿とは違った人生になりましたが、資本金1億円、4つの出資会社から13名の人が出向命令を受けて集まりスタートした当時のベンチャー企業の息吹が、昨日のこのように思い出されます。